The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ゾラの諸作品における出産描写の変遷 ： 『ごった煮』を中心に
Author(s)	間野, 照世
Citation	Gallia. 2008, 47, p. 45-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5808
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ゾラの諸作品における出産描写の変遷
――『ごった煮』を中心に――

間野　照世

はじめに

博物学に基づく現実の忠実な描写を目指す自然主義作家のゾラにとって、人間の生死を詳細に描くことは彼の命題とも言えるものであった。実際に、ゾラの作品には死が溢れ、戦争や殺人をはじめ梅毒や白血病、アルコール中毒や神経症による狂死など、壮絶な死を遂げる人々の様子が残酷なまでに克明に描かれている。しかし、ゾラはこのように死を克明に描く一方で、死が文学において既にありふれた主題であることにも気付き始めていた。そのため、彼は本来生理学的領域に属する問題とされていた「出産」を新たな文学的素材として取り入れる決意をするのである。『ルーゴン・マッカール叢書』*Les Rougon-Macquart*の第15巻『大地』*La Terre* (1887) が出版された翌日の*Figaro*紙には、この時のゾラの決意が次のように表明されている[1)]。

> J'ai souvent déclaré que je ne comprenais pas, en art, la honte qui s'attache à l'acte de la génération. Aussi ai-je le parti pris d'en parler librement, simplement comme du grand acte qui fait la vie; et je défie qu'on trouve dans mes livres une excitation au libertinage! C'est comme pour l'accouchement que vous me reprochez, j'estime qu'il y a là un drame aussi saisissant que celui de la mort. Nous avons cent morts célèbres en littérature. Je m'étais promis de tenter trios accouchements: les couches criminelles et clandestines d'Adèle, dans *Pot-Bouille*; les couches tragiques de Louise, dans *La Joie de vivre*; et je viens, dans *La Terre*, de donner les couches gaies de Lise, la naissance au milieu des éclats de rire. Ceux qui m'ont accusé de salir la maternité n'ont rien compris à mes intentions. (*Le Figaro*, le 16 novembre 1887.)

作品『大地』における露骨な性描写をめぐって、有名な「五人の宣言」をはじめとする反自然主義運動[2)]が巻き起こったのは、この作品がまだ*Gil Blas*紙に連載途中の1887年8月18日のことであった。したがって、ここで言う「私を非難した

1）ジャーナリストで劇作家のPhilippe Gille (1831-1901) によるインタビュー形式。
2）『大地』は1887年5月28日から同年9月15日にかけて*Gil Blas*紙に掲載。一方、自然主義を標榜する5人の若手作家が*Figaro*紙に「五人の宣言」を発表し、ゾラに絶縁状を突きつけたのは同年8月18日のことである。つまり、『大地』に対する非難は作品完結前に行われたものであり、彼らの批判が作品全体の意図を理解した上でなされたものではないと考えられる。

人々が、作品全体の意図を掌握しきれないうちにゾラを猥褻な作家と中傷した人々を指すことは明らかだ。確かに、ゾラはこの作品『大地』において欲情をむき出しに生きる男女の姿や、人間と雌牛が同時に「出産」する場面を描くなど、倫理性を問われかねない描写を行っているのは事実である。しかし、この作品『大地』が、三種類の「出産」を実験的に描き分けるという確固たる目的のもとに書かれた「出産」三部作の一部であると考えるなら、ゾラの作家としての真価はこの三部作すべてをもって評価されるべきではないか。先ほどの*Figaro*紙におけるゾラの力強い筆致からは、この点を考慮せずに彼を酷評した者たちに対する強い抗議と、作中に描かれた「出産」が、作者の明確な意図のもとに設定された新たな文学的テーマであるという主張が読み取れる。では、その意図とは何か。ゾラの作品における「出産」に込められたこの意図を探ることが、本論文の目的である。

本稿ではまず、ゾラが「出産」を新たな主題として特に取り上げようと思い立った理由について考察する。その後に、ゾラが「出産」を意識する前と後では実際の作品における「出産」描写にも変化が表れているのか、彼が「出産」を意識する前の作品『居酒屋』*L'Assommoir* (1877) と、実際に「出産」を意識した「出産」三部作の第一部『ごった煮』*Pot-Bouille* (1882) を取り上げ検証する。

Ⅰ.「出産」描写に関心を持った理由

ゾラが「出産」を新たな文学的素材として意識したのが『ごった煮』を執筆する1881年よりも以前であったことは、*Figaro*紙におけるゾラ自身の発言が示す通りである。しかし、それまでの彼の作品傾向を見れば、ゾラは病に侵され血まみれとなって死んでゆく残酷な死を描くことこそ自然主義作家である自分の使命と考えていたように思われる。そのゾラが、「出産」を死と同じ次元にまで引き上げ、自らの作品の主要なテーマに据えようと思い立ったのはなぜか。

その理由の一つとして考えられるのが、1880年にゾラの母エミリー[3]とフロベール[4]、そしてデュランティ[5]といった、ゾラに近しい人物が相次いで亡くなったことである。死を描く作家ゾラにとっても、現実として訪れたこの一連の死は相当重いものであったに違いない。その証拠に、ゾラはこの年、それまで毎年一冊のペースで出版し続けてきた『叢書』に手をつけていない[6]。さらに、この翌年に執筆されるのが、あの「出産」三部作の第一作『ごった煮』である。そう考えれば、ゾラがこの1880年の出来事をきっかけに死と向き合い、死そのものよりも生命の誕生である「出産」を描くことに新たな価値を見出したとしても不思議ではない。しかしながら、ゾラは母親や友人の死を受けて、ただその反動によって明るい「出産」を描く作家へと変貌したわけではなかった。なぜなら彼の描く

3）Emilie Zola：1880年10月17日に水腫を併発した心臓病により死去。
4）Gustave Flaubert：1880年5月8日に脳溢血で急死。ゾラはフロベールの生前、同年3月28日にゴンクールらとフロベールを見舞っている。
5）Louis-Edmond Duranty：1880年4月8日死去。ゾラが遺言執行人を務めた。
6）ただし、1880年から1882年にかけて『実験小説論』をはじめとする評論集は刊行されている。

「出産」は、そのほとんどが幸福とは縁遠い、むしろ死の起源であることを示唆するものとして描かれているからである。では、実際にゾラの描く「出産」がどのような変化を遂げたのか、作品の具体的な記述を通じて詳しく見てみよう。

Ⅱ.「出産」描写の変遷

Ⅱ－ⅰ.『居酒屋』における出産

『叢書』の第7巻『居酒屋』*L'Assommoir* (1877) [7] は、19世紀パリの場末で苛烈な労働と貧困に耐えながらも力強く生きる、洗濯女ジェルヴェーズの一生を描いた作品である。彼女の「出産」場面を見てみよう。

> Elle faisait, ce soir-là, un ragoût de mouton avec des hauts de côtelettes. Tout marcha encore bien, pendant qu'elle pelurait ses pommes de terre. Les hauts de côtelettes revenaient dans un poêlon, quand les sueurs et les tranchées reparurent. Elle tourna son roux, en piétinant devant le fourneau, aveuglée par de grosses larmes. Si elle accouchait, n'est-ce pas? ce n'était point une raison pour laisser Coupeau sans manger. Enfin le ragoût mijota sur un feu couvert de cendre. Elle revint dans la chambre, crut avoir le temps de mettre un couvert à un bout de la table. Et il lui fallut reposer bien vite le litre de vin; elle n'eut plus la force d'arriver au lit, elle tomba et accoucha par terre, sur un paillasson. (*A*, p. 467.)

夫の帰りを待ちながら羊の背肉を煮込む合間に、まるで「歯でも一本抜く：une dent à arracher」(*A*, p. 469.) ように床のマットの上に生み落とされる赤ん坊。後にナナと名付けられるこの赤ん坊が、その後数奇な運命を辿ることは、この時点で既に暗示されていたのかもしれない。

ジェルヴェーズはこの翌日から掃除をし、夫の夕食を準備した。そして三日後には早くも洗濯婦として職場に復帰する。「裕福なご婦人がたであれば、出産で弱りきった様子を見せるのも結構だわ。でも、貧乏人の私たちには休んでいる暇なんてありゃしないのよ：C'était bon pour les dames d'avoir l'air d'être cassée. Lorsqu'on n'était pas riche, on n'avait pas le temps.」(*A*, p. 472.) という彼女の言葉には、差し迫った日常を暮らす労働者階級の困窮ぶりが滲み出ている。また、先ほどのナナの「出産」場面にしても、料理をしながら子供を産み落とすといった状況が、当時の労働者階級の現実として実際にあったことを示すものと言えよう。『居酒屋』における「出産」描写の意図はまさに労働者の窮状を読者に訴えることにあり、この時点ではまだ、ゾラの「出産」そのものに対する関心は芽生えていなかったと思われる。では、ゾラが実際に「出産」を意識して書いたと言う「出

7）『居酒屋』の引用はすべてプレイヤッド版を使用。各引用末にはタイトルの略号の（*A*）とページ番号を付す。*L'Assommoir* in *Les Rougon-Macquart*, t.Ⅱ, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1967.

産」三部作の第一部『ごった煮』にはどのような「出産」が描かれているのか。次に、『ごった煮』における「出産」場面について検証する。

Ⅱ－ⅱ．『ごった煮』における出産

a）．労働者の出産―アデールと靴縫女―

『叢書』の第10巻『ごった煮』*Pot-Bouille* (1882) [8] は、品行方正で身分の高い者だけが住むことを許されるパリのアパルトマンを舞台とする物語である。家主の希望とは裏腹に、このアパルトマンの住人はといえば、女中に手を出す主人をはじめ、アパート内の女性を次々と渡り歩く青年や、娘の政略結婚によって名誉欲と金銭欲とを同時に満たそうとする夫人、彼らブルジョアの内情を知り尽くし、その秘密を互いに暴露し合うことによってストレスを発散する女中など、いずれも強烈な個性を放つ面々であった。そして、このように人間関係が複雑に絡まり、様々な欲情が渦巻く「ごった煮」と化した生活空間では、誰かが人知れず妊娠することも珍しい出来事ではなかった。案の定、女中のアデールは父親の分からない子供を身籠り、既に妊娠 9 ヶ月の身重となっていた。彼女は品行に厳しいこのアパルトマンから追い出されるのを恐れ、妊娠が周囲の者に気付かれないよう常に気を配っていなければならなかった。そんなある日、つわりに耐えながらも仕事をこなし、やっとの思いで寝床についた彼女は突然激しい腹痛に襲われる。陣痛が始まったのだ。それと同時にゾラの緻密な「出産」描写が開始される。

> Au milieu d'une douleur, il y eut une rupture, des eaux ruisselèrent, ses bas furent trempés. […] Et elle était à peine revouchée, que le travail d'expulsion commonça. […] La gorge renversée, les jambes élargies, elle se cramponnait des deux mains au lit de fer, qu'elle ébranlait de ses secousses. C'étaient heureusement des couches superbes, une présentation franche du crâne. Par moments, la tête qui sortait semblait vouloir rentrer, repoussée par l'élasticité des tissus, tendus à se rompre; et des crampes atroces l'étreingnaient à chaque reprise du travail, les grandes douleurs la bouclaient d'une ceinture de fer. Enfin, les os crièrent, tout lui parut se casser, elle eut la sensation épouvantée que son derrière et son devant éclataient, n'étaient plus qu'un trou par lequel coulait sa vie; et l'enfant roula sur le lit, entre ses cuisses, au milieu d'une mare d'excréments et de glaires sanguinolentes. (*PB*, pp. 369-370.)

先ほどの『居酒屋』におけるジェルヴェーズの「出産」とは対照的に、鉄製の冷たいベッドの上で繰り広げられるこのアデールの「出産」は、孤独と苦痛に満ちたものであった。プレイヤッド版で約 5 ページにも及ぶこのアデールの「出産」

8）『ごった煮』の引用はすべてプレイヤッド版を使用。各引用末には題名の略号の（*PB*）とページ数を記す。*Pot-Bouille* in *Les Rougon-Macquart*, t.Ⅲ, «Bibliothèque de la Pléiade», Gallimard, 1967.

からは、ゾラが確かに「出産」を新たな文学的素材として取り込み、できるだけ詳細に、臨場感溢れるものとして描こうとしたことが窺える。また、ここで興味深いのは、ゾラがこの生命が誕生する瞬間の臨場感と緊迫感を、得意の文献から学んでいたということである。1873年に出版されたLucien Pénardの『妊婦と助産婦のための実用ガイド[9)]』を繙き、「出産」に関するあらゆる知識を頭に叩き込んでいたゾラは、アデールの「出産」にこの『ガイド』で得た知識をふんだんに盛り込んだのであった。

そして迎えたアデールの壮絶な「出産」も、ここでようやく終わったかに見えた。しかし、心身ともに疲れ果てたこの幼い母に、ゾラは赤ん坊を抱く束の間の幸福さえ与えはしなかった。ゾラは彼女が女中であるという事実を見逃しはしなかったのだ。「出産」を終えたアデールはまだ産後の疲れが癒えぬ中、仔猫のように泣く赤子を上掛けで覆って泣き止ませた後、急いでへその緒を切り、新聞紙にくるんで商店街に捨てに行った。生まれたばかりの我が子を捨ててまでも、酷使されると分かっている館に戻るより他に彼女には生きる術がなかったのだ。

ゾラはアデールの悲惨な「出産」を描いた後で、今度は彼女よりもさらに不幸な「出産」を迎える靴縫女を登場させる。父親不明の子を妊娠したという点では、彼女もアデールと同じであった。しかし、その妊娠を家主に知られてしまった彼女は、「出産」間際であるにも拘らずアパルトマンを追い出されてしまう。せめて子供を産むまで数日の猶予をくれと嘆願する彼女に、管理人は冷酷にも即刻退去を命じた。陣痛に耐えながらも独り手押し車を引いてアパルトマンを後にした彼女は、その後すぐに子供を産んだ。そして、養える見込みのないこの哀れな赤ん坊を前に絶望した彼女は狂気となり、子供を二つに切断するのであった[10)]。

生きるために子供を捨てざるを得なかった女中アデールと、絶望のあまり子供を殺害してしまった靴縫女。この二人の労働者の「出産」を通じてゾラが階級問題を論じようとする狙いは明らかであり、こうした手法は『居酒屋』における手法と何ら変わってはいない。しかし、『ごった煮』における「出産」がこれまでと大きく異なるのは、「出産」の状況が克明に描写されている点にあると言えよう。先ほどの『居酒屋』における「出産」を思い出してみよう。ジェルヴェーズの「出産」は、まるで動物が「出産」するかのようなそっけないものとして描かれていたはずだ。それに比べて、この『ごった煮』におけるアデールの「出産」は、あまりにも残酷でリアリスティックなものとして描かれている。同じ「出産」か

9）Lucien Pénard, *Guide Pratique de l'Accoucheur et de la sage femme*, Librairie J.-B. Baillière et Fils, Paris, 1873.

10）この靴縫女には嬰児殺しの罪として懲役5年の判決が下される。嬰児殺しをはじめ病気や貧困に拠る乳幼児の死亡に関しては、ゾラも1896年5月23日に*Figaro*紙に掲載された記事*Dépopulation*の中で言及している。ゾラの妻も、結婚前の1859年3月11日に私生児Carolineを出産するが、経済的理由により生後4日目の娘をパリの孤児院に預けている。同施設入居者としては、Carolineは同年1月から数えて第810人目にあたり、当時の貧困層における育児の難しさが窺える。Carolineは、真冬に暖房のない列車に乗せられモンフォールの施設へと送られた後、飢えと不衛生により同年3月23日に死亡。19世紀フランスにおける出産状況およびゾラの妻の生涯に関しては、Evelyne Bloch-Dano, *Madame Zola*, Grasset, Paris, 1998.に詳しい。

らこうも違った印象を受けるのは、「出産」に伴う物理的な「産みの苦しみ」が描かれているか否かにあると思われる。この「産みの苦しみ」が長く詳細に描写されればされるほど、辛い「出産」を経てもなお報われない母親たちの現実が、より一層哀れなものとして浮かび上がってくるのである。

このように、『ごった煮』におけるアデールと靴縫女の「出産」描写からは、ゾラが「出産」を単なるブルジョア批判のためではなく、そこから一歩踏み出した、子供を産んでも育てられない「母親としての苦しみ」を描くための手段として用いたことが窺える。では、実際にブルジョアという身分が備わり、子供を産み育てることも可能な女性をゾラはどのように捉え描いたのだろうか。同じ『ごった煮』に登場するマリーの「出産」を見てみたい。

ｂ）．中産階級の出産―マリー―

アデールと同じアパルトマンに住む公務員の妻マリーは、家族に見守られながら安産で女の子を産んだ。孤独なアデールや靴縫女の「出産」と比べ、彼女の「出産」ははるかに恵まれたものであったと言えよう。しかし、産んだ後の「母親としての苦しみ」という観点からすれば、このマリーの「出産」もまたそれほど幸福なものではなかった。というのも、彼女にはブルジョア階級ならではの「産みの苦しみ」があったからだ。彼女を苦しめる最大の原因、それはまさに、ブルジョアはむやみに子供を作るべきではないという社会の風潮そのものであった。ゾラはこの風潮を助長する象徴的な人物として、マリーの母親を登場させている。

マリーの両親は共に元官僚で、とりわけ母親は安定志向の強い人物であった。彼女は娘が無事一人目を「出産」した後、婿のジュールにこう忠告した。

> Si nous en avions en un second, jamais nous n'aurions pu joindre les deux bouts… Aussi, rappelez-vous, Jules, ce que j'ai exigé, en vous donnant Marie : un enfant, pas plus, ou nous nous fâcherions!... Les ouvriers seuls <u>pondent</u> des petits comme des <u>poules</u>, sans s'inquiéter de ce que ça coûtera. Il est vrai qu'ils les lâchent sur le pavé, de <u>vrais troupeaux de bêtes</u>, qui m'écœurent dans les rues. (*PB*, p. 65.)

下線部に見られるように、マリーの母親は多産な女性を「娼婦・売春婦」という軽蔑的な意味を持つ「雌鳥：poule」と呼び、出産行為そのものを「産卵」を意味する動詞«pondre»によって表現し、さらには生まれてきた子供たちを「獣の群れ」扱いしている。彼女が労働者に対する偏見に満ちた言葉を繰り返すのは、娘夫婦に労働者との身分の違いをはっきりと認識させ、これ以上子供を作らせないことを望んだために他ならなかった。ところがその母親の努力も空しく、マリーは二人目[11]を産む。「まぁ、二人目ならよくあることだわ。[…] でもお婿さん、これ以上はだめですよ：Enfin, deux, c'est possible, […] Seulement, mon gendre, ne

11）マリーは母親の怒りを鎮めるため、この子供をパリ近郊に里子に出した。

recommencez pas.」(*PB*, p. 278.) と諭す母を尻目に、マリーは三人目を身籠る。卒倒する両親の影で、アパルトマンの住人たちは次の如く囁くのである。

> […] trois enfants, pour des employés, c'était une vraie folie; et le concierge laissa même entendre que, s'il en poussait un quatrième, le propriétaire leur donnerait congé, car trop de famille dégradait un immeuble. (*PB*, p. 360.)

この囁きは、当時のフランス社会ではブルジョア家庭は計画的な産児制限を行い、一方、労働者家庭は無計画に多産であるという認識が一般的であったことを示唆するものである。その常識を見事に破ったマリーの「出産」は、ブルジョアの住むこのアパルトマンでは嫌悪の対象でしかなかった。母親だけでなく住人からも注がれる冷ややかな視線は、マリーとその一家の暗い未来を暗示するかのようである。ゾラはこのマリーの「出産」を通じて、これまで批判の対象として描いてきたブルジョア階級にも、「出産」に纏わる辛い現実があるという新しい観点を示したのだ。しかし、このマリーの「出産」にはさらにもう一つ、新たな問題が組み込まれていた。それは、これまでマリーの母親や住人によって示唆されてきたブルジョア階級における共通認識、つまり、「ブルジョア家庭は計画的な産児制限を行う」という認識がどのような背景から生まれ、またそのような認識がいかにフランスの未来を危ういものにしているのかという問題であった。

そもそも産児制限という考え方がフランスに広まったのは、19世紀前半のことである。当時、フランスの人口が過剰であることを危惧した自由主義経済学者らは、人口の増加による資源圧迫を回避するためには結婚を延期し、家族を制限すべきであると主張するマルサス主義[12] にその解決を求めた。こうしたフランス社会の動きを裏付けるように、後の経済学者Leroy–Beaulieuはその著『人口問題』*La Question de la population* (1913) の中でこう述べている。

> フランスの最も出生率の低いいくつかの県を特徴づけるものは、出世主義とその精神、最高にまで昇りつめようという傾向ならびに一方で、自身が迅速に高位に到達するためには子供に煩わされるべきでないということ。他方で、その子孫が迅速に高位につくことを望むなら、その努力と資力を一人か二人だけに、二人よりも寧ろ一人に集中させるのがよいという思想である[13]。

この『人口問題』における記述の中にまさにマリーの母親と共通する思想が見られ、さらに、こうした問題が現代社会にも通ずる問題であることはきわめて興味深い。またそれ以上に、マリーの母親に代表される保守的ブルジョア思想がフ

12) 19世紀フランスにおけるマルサス主義思想の受容に関しては、以下の三冊を参照。岡田實『フランス人口思想の発展』千倉書房、1984年. Yves Charbit, *Du Malthusianisme au Populationnisme*, Presses Universitaires de France, 1981. J. Dupaquier, A. Fauve-Chamoux, *Malthus Past and Present*, Academic Press, 1983.

13) Paul Leroy–Beaulieu, *La Question de la population*, Paris, 1995, p. 403.

ランスの人口増加に歯止めを掛けるどころか、逆に人口減退の危機を招いてしまったという事実も見逃し難い。「人口が生存資料を圧迫する」というマルサス主義思想の流れを受けて産児制限を推進してきたフランスは、19世紀後半になるとこれまでとはうって変わって人口減退の危機に直面していた。そのような状況において、フランス国家がマルサス主義とは訣別し、新たに人口の増加に取り組み始めたことは言うまでもない。そう考えれば、ゾラがなぜ、1882年に出版され、物語の時代設定も1860年代に置かれたまさに19世紀後半の作品とも言うべき『ごった煮』に、娘に産児制限を促すマリーの母親のような人物を登場させたのか、その理由が理解できよう。ゾラはマリーの母親や住人たちを、既に衰退しつつあるマルサス主義信望者の生き残りの象徴として描いたのであり、『ごった煮』はフランスの未来を危惧する生命の賛美者ゾラの思いが織り込まれた作品なのである。

おわりに

ゾラが『大地』において真実を描こうとする自然主義の姿勢そのものを否定されたのは、その猥褻な性描写が問題視されたからであった。しかし、ゾラは母親や友人の死をきっかけに死と向き合い、「出産」こそが様々な問題を提起する根源的なテーマであると考え始めた。そこで、ゾラはまず「出産」を労働者の置かれた悲惨な現状を明らかにするための手段として用い、同じ未来を創造する担い手であるはずの生命がその身分の違いによって脅かされているという現実を明らかにした。続いて、「出産」に伴う物理的な「産みの苦しみ」を詳細に描くことにより、「出産にも死と同じくらい衝撃的なドラマがある」ことを示した。そして最後には、「出産」を人口減少問題という階級を超えた社会問題までをも包括する壮大なテーマとして捉えるに至ったのである。これらの点を考慮すれば、『大地』に描かれた生殖行為や「出産」もまた、ゾラにとっては「母性を汚す行為」ではなく、むしろ豊穣な母性と生命への賛美であったことが理解できよう。

しかし、ゾラのこうした「出産」に対する取り組みにも変化が現れる。『叢書』の最終巻『パスカル博士』*Le Docteur Pascal* (1893) において、ゾラは「出産」の物理的描写を一切排除し、新生児の誕生を通じて「出産」があったという事実のみを示すのである。この突然の変化には、ゾラ自身が父親になったことの他に、「出産」に関する問題がようやくゾラの望んでいたような社会的で広範な論議に包括され始めたことが大きいと思われる。晩年になり、ゾラの関心はもはや「出産」という行為そのものではなく、母親の子宮内に宿る胎児と、生まれた後の子供の成長へと移行していた。そしてゾラの「出産」場面を省略する動きは、その後の『豊穣』*Fécondité* (1899) を経て『労働』*Travail* (1901) に至るまで続けられる。このように、ゾラの「出産」描写は変化していったが、社会の問題をいち早く察知し、それを作品の中で世の中に問う自然主義作家としての姿勢は生涯変わらなかった。本稿で、ゾラの諸作品における「出産」描写の変遷を辿ることにより、ゾラの作家としての特質と変遷を明らかに出来たのではないだろうか。

（大阪大学博士課程在学中）